

# 巻 頭 言

顧問教授 木庭元晴

9月半ばに突発性難聴発病。市立病院で処方された薬は全く効かず、めまいの点滴も全く功を奏しない。10月初旬、阪大病院のめまい専門の先生の診察をうけた。いい治療法があつて全快する方向性が見えることを期待した。若き先生曰く、命にかかわるものではなく、左耳内耳がダメージを受けて、左右のバランスが悪いから、めまいがするのだという。自ら運動して、この新しい環境に脳を慣れさせる、新しい脳のネットワークを作ればいいのだと。

この診断を受けるまでは、自分以外の世界がぼくを救済してくれる、という期待があつた。そうだな。自分だよなあ。

改めてそれを感じ、薬を捨てた。それで急に元気になった。自らのために自らがする、そうしてダメージに慣れる。人生に、時間にリセットはないのだよなあ。ぼくはこれまで国内や海外の調査を地球科学の観点から数多く実施してきた。しかしここ数年前からまとめる時間がないことを実感し、調査を拡大してゆくよりも、これまで調査してきたこと、考えたこと、築き上げた研究環境を積極的に利用すべきだと感じ、そう行動している。とはいえ、突発性難聴発病時には30分ほど立てなくて、こわばって横になっていた時は、今後の調査や研究ができなくなるのではないかと弱気になった。今もめ

まいと耳鳴りが続くが、自分で世界を創りうる今のぼくの新たな環境に喜びを感じている。まだまだ、探検部の顧問の資格があると自負する。

世界の大学の探検部の小さな部室では、小さな探検が日々、目論まれている。さあ、行こうか。小さなドキドキ、浮き浮きが生まれている。アルバイトや仕事ではない自分たちの時間と空間を創る、そういう自由人の活動が小さな部室にはある。マラリア蚊とヤマビル禍の危険性が高い熱帯の地、数メートル先も見えない砂つぶて舞う砂漠、極寒の大河の上、手足の力が萎えてゆく中での山岳斜面、体一つでやっと匍匐してできる暗闇の鍾乳洞のなか、こういった自分と向き合える場が、小さな部室と繋がっている。

日常ではまみえることのできない自然界に息づく気配、人または人の造形よりも、より根源の一端に触れる喜び。生きている喜びを噛み締めることができる。人や社会よりも、存在の根源に触れることで生きる喜びを獲得する。この高みを

求めることが探検活動であるとぼくは思っている。そして、生命力溢れる大学生時代にそれを体験できるまたはできた幸せに羨望を感じる。

探検部の過去50年の歴史のなかでは残念ながら犠牲はあった。それを踏まえて、いまのOB・OGのサポート体制が続く。行く手に崖があればロッククライミング、濁流があれば渡りきる技術、周到な計画と突発的な事態に対処する機転と勇気、これは先輩から後輩に伝えられてゆく。これからも個の独立、自らの高みに向かう良き探検部の伝統が続きますように。

(文学部教授)